

# 藤原定家における述懐的なるもの

青柳 恵 介

## 1

建久九年（一一九八）、定家は守覚法親王家五十首において次の歌をよんでいる。

年ふとも忘れむものか神風や御裳濯川の春のゆふぐれ

（一六三九）<sup>註</sup>

春十二首中十首目の歌で、一応素直によめば惜春の感慨をもった叙景歌に見えるが、「年ふとも忘れむものか」と

いう表現は、単なる惜春の情の吐露としていささか大仰である。加えて御裳濯川なる固有名詞には、何か特別な作歌事情があつたのではないかという想像を誘うものがある。『拾遺愚草抄出聞書』はその辺に目をとめたのであろう、「大将殿勅使に立給し時御供ありし時分の歌也心の別の儀なし風情をおもふへし」と記している。

大将殿すなわち藤原良経が勅使に立って伊勢大神宮に詣でたのは、建久六年（一一九五）二月のことである。そのとき定家も良経に扈從した。この伊勢下向が、良経・定家にとって思い出深い参詣の旅であつたことは、新古今集神祇歌に、

大將に侍りける時、勅使にて大神宮に詣でてよみ侍りける  
攝政太政大臣

神風や御裳濯川のそのかみに契りしことの末をたがふ  
な

があり、それと並んで、

同じ時、外宮にてよみ侍りける

藤原定家朝臣

契りありて今日みや川の木綿鬘長き世までもかけて頼  
まん

が収められていることから知られるのである。この年のやはり二月に、源頼朝が南都東大寺供養の結縁のため上洛している。頼朝上洛の本来の目的は、言うまでもなく世相安定後の朝廷に対する工作にあった。彼の朝廷工作が親幕派の九条兼実を通してのものであったことも言うまでもない。良経の伊勢下向は、頼朝の上洛時期と重なっている。京都と鎌倉の二つによって成り立つ新しい政治形態の要となる九条家を代表して、良経は伊勢へ勅使として向ったの

である。大神宮で彼が祈ったことは、先ず九条家の繁栄であろう。「御裳濯川のそのかみに契りしことの末をたがふな」は、藤原氏の祖、天児屋根命が天照大御神と約束したことを忘れないでいただきたいと言っているのである。

良経の祈りと較べると、定家の祈りはスケールが小さくなるが、詮ずる所自分の家の繁栄を願っている点では同じである。「契りありて今日みや川の木綿鬘」とい、下している所には、良経の伊勢参拝に供奉出来た率直な喜びが現れていよう。多少その意味の違いは認められるが、二人とも「契り」を伊勢でよんだのであった。ここには、未来に對する明るい光が射している。

が、歴史は彼らが願うようには動かなかつた。翌建久七年十一月に、所謂建久の政変が起きる。尊王派の源通親の策略によって、九条家一門は失脚する。その波が九条家の庇護を受けていた定家にまで及んだことは勿論である。守覚法親王家五十首は、そうした九条家一門の沈淪のさなかであつて、よみ出されたものであつた。明月記の建久八年十二月五日の条によると、守覚法親王みずからが俊成・定家父子の五十首歌詠進を望んだという。定家はそこで次の如く書く。「時云、身雖禪多聞此事、無左右領

状。」身に憚りが多いとは、当時彼の歌が「新儀非據達磨哥」と誹謗されていたことを思い浮かべせるが、同時に彼が置かれていた政治的立場をも考慮しなければならぬ言である。

はじめの「年ふとも」の歌にもどろう。惜春の情を述べるには大仰と思われた「年ふとも忘れむものか」という表現は、やはり三年前の伊勢参詣を回想しているためのものだろう。しかし、その回想は『抄出聞書』が「心の別の儀なし風情をおもふへし」といつているような性質のものであったかどうか。伊勢において良経が「契りしことの末をたがふな」とうたい、自身が「契りありて」と喜びをうたった明るさの反転した暗さ、その暗さからの心の迸りが、「忘れむものか」という聞きようによつては怨みがかましい表現になっていると、私は思うのである。いわばこの春歌は述懐歌的要素を多分に持った歌だ。だが、定家という歌人は決して自分の生な感情を顕わにするような人ではなかった。この歌についても、それは言えるだろう。

私見によれば、この歌は源氏物語宇治十帖浮舟の巻の、

年経とも變らん物かたち花の小鳥がさきに契る心は

を念頭に置いて作られたものである。源語の「年経とも」の歌は、宇治十帖後半のクライマックスとも言うべき所で、匂宮が浮舟にうたった歌だ。匂宮はこっそり浮舟をかき抱いて、宇治川対岸の家へ連れ出す。二人を乗せて宇治川に漕ぎ出された小舟は、橘の小鳥のあたりへさしかかる。匂宮は小鳥の常磐木を見、「かれ、見給へ。いとほかなけれど、千年も経べき、緑の深さを」と言い、「年経とも」の歌をうたう。これに対して浮舟は、

ぬ たち花の小鳥は色も變らじをこの浮舟ぞゆくへ知られ

と唱和する。源氏物語の中で、最も美しく抒情的な場面の一つである。定家の時代においても、この場面が印象的で宇治十帖後半を代表すると考えられていたことは、『無名草子』（建久九年頃の成立と言われる）で、浮舟物語を「小鳥」（橘の小鳥の意であろう）と呼んでいたことからもうかがわれる。

定家は三年前の伊勢における「契り」を、浮舟の巻の匂

宮の小島における「契り」と重ねようとしたのではあるまいか。句宮の「契り」は果敢ないものであった。それ故、定家の回想の中で重なって行くのであろう。もしかすると、定家は現在の己の身の不遇を、浮舟の「この浮舟ぞゆくへ知られぬ」という詠嘆によって暗に示唆しなかったのかも知れない。とすれば、この歌は「心の別の儀なし」というような単純な歌ではなく、極めて虚構的な歌に思われ来る。

付言して置けば、守覚法親王家五十首ではこの歌の前、すなわち春第十首目には「春の夜の夢の浮橋とだえて峯にわかるる横雲の空」がある。言うまでもなく源氏物語を踏まえた歌であり、宇治十帖により添う創作心理は「年ふとも」にまで及んでいると見るべきであろう。想像になるが、定家の念頭にあったものは先ず宇治十帖の世界、具体的に言えば浮舟の巻における句宮と浮舟の唱和であったのではないか。頭に拡がる宇治川の光景は、印象深かった御裳濯川の景色と、そして今となつては果敢ないものになつてしまった良経と己の「契り」を喚起せしめることとなつた。彼は自分の述懐の表現の糸を、句宮と浮舟の恋歌を踏まえることによつて掴んだ。そうしてよまれた歌は、惜春

の情を表す平明な景気の歌の姿をとつた。

定家の歌を考へるときに、歌の述懐的なるものは案外看過されてゐるように私は思う。四季の歌の中にも大胆に述懐の要素を持ちこんだ歌人は、他ならぬ父俊成であつた。また、月をよんでも花をよんでもたくまざる述懐歌になつた歌人は、西行であつた。俊成や西行の歌が如何に強く定家に影響を与えたか、これは今更論じるまでもないことだ。しかし、「年ふとも」の歌一首をとつてみても、定家の歌における述懐的なるものの働きは、俊成や西行のそれと微妙に異つて来ていることもまた事実である。以下、私は同じ守覚法親王五十首の歌で、どのように俊成的あるいは西行的なるものを吸収し、それを変容せしめてゐるか、若干の例を引きながら考へて行きたい。

## 2

そなれ松こず多くだくる雪折れに岩うちやまぬ浪のさ  
びしさ (一六六五)

冬七首の第六首目の歌だ。「そなれ松」は「磯馴れ松」

のことで、海浜に生え、海風のために傾き曲がりくねった松をいう。その松の姿を連想するだけで、耐えて生きるものの苦しみが伝わって来そうだ。松の梢には雪が積もり、その重みで枝は折れる。それに加えて、冬の暗い海では荒しい波が岩を打ちやまない。海辺の無人の光景は「さびしさ」という体言止めに集約されて静止する。『拾遺愚草抄書』は詞花集所収、源重之の

風をいたみ岩うつ波のをのれのみくだけて物を思ふころかな

を引いている。本歌と考えているのだろう。重之の恋歌は定家自身後年の百人秀歌に撰んでいるし、それ以前にも俊成の初撰本古来風体抄に採られていることなどからして、当然定家の頭にあつた歌であろう。定家は本歌取を行う際に、恋歌の序詞にあたる部分を実際の景として取って来て、四季の歌にするという手法を大変よく用いる。この場合もそうである。本歌がよく人口に膾炙されているのであれば、上の句の景を取るだけでおのずから下の句の情は歌の余情となつて響くのである。だが、同じ言葉遣いがな

い点で、これは明確な本歌取とは言えない。「くだけて物を思ふころかな」という感情を歌の下の心に隠していることは間違いないが、重之の歌一首のみで定家の歌の創作動機が解けるものもあるまい。定家の歌の主題は「岩うつ浪」ではなく、あくまで「そなれ松」であると考える。

源俊頼の物名歌に、

須磨の浦やなぎさにたてるそなれ松しづ枝は波のうたぬ日ぞなき

がある。むしろこの歌の方が重之の歌より、定家の歌に近い。波が岩を打つのではなく、「そなれ松」の「しづ枝」を打つのであるが、具体的な歌のイメージは俊頼の歌にあつて直接に触発されたと考えられよう。しかし俊頼の歌は単なる写真である。やはり俊頼の歌も定家にとつては一つの素材に過ぎなかつたと思う。歌の素材——言葉といつてもいい——が重要なものであるのは無論だが、言葉と言葉をつなげるものは、心である。「そなれ松」の歌の場合、言葉に先行する心とは、具体的に言うると、歌の述懐的な要素だと思ふ。

新古今集雜歌上には、「雪に寄せて述懐の心をよめる」として藤原俊成の次の歌を載せている。

袖山や梢に重る雪折れにたへぬなげきの身をくだくら  
ん

撰者は定家と雅経であつたらしい。初出は保延六年（一一四〇）の所謂『述懐百首』においてであつた。『述懐百首』は堀川院百首の題のもとで「述懐によせてよみける歌」である。身の不遇を百の景物に結びつけて、綿々と抒情をうたい上げた百首である。この百首は後年の俊成和歌の祖型であり、景物を感傷的な心情で捉えようとする視線の出発がここに感得される。ここで先ず問題となるのは「述懐」の意味するところであろう。第一に官位の昇進の遲滞を嘆くことがあげられるが、「述懐」の意味がすべてそれに収斂されるわけではない。『述懐百首』を閲してみると、「春にあはぬ身をしる雨の降り込めて昔の門の跡やたえなむ」であるとか「胸をやく煙は高く立つ物をわが身は人のしもになりぬる」というような歌にうかがわれる述懐は、まさに社会的な地位の低さをかこつという意味だが、「数なら

ぬ袖にはしめし梅の花此世にとまるつまともぞなる」や「憂身をばわが心さへふり捨てて山のあなたに宿もとむなり」は、世を捨て去ることが出来ぬものの嘆きであろうし、「ゆふまぐれ霧立ちわたる鳥部山そこはかとなくものぞ悲しき」とか「冬されば野原もいと霜枯れてものさびしくもなりまさる哉」といった歌になると、最早うたう動機が何であれ、ある風景を前にして内面にしみ入ってくる憂愁の表白になっている。つまり俊成の「述懐」の包含するところは、かように幅が広いのである。単に官位の昇進の遲滞に対する嘆きのみをもって俊成の『述懐百首』を限定すべきではない。諸々の心境を景物に託して、後年の彼自身の言葉を借りれば「深く境に入ふかくまゝ」っていった点に、『述懐百首』の達成はあつたと、私は考へる。非常に大雑把な物言いになるが、俊成は『述懐百首』において景物を我が身、あるいは我が人生の譬喩であるという視点を歌に導入してくることによって、心と物の円滑な対応をうたうことが出来たのであつた。

新古今に撰入された「袖山や」の歌について、例えば本居宣長は「めでたし、詞めでたし、なげきに木をそへたり、くだくは、雪にをれて、裂々くだくるによせたり、三

の句のにもし、少しおだやかならざるが如くなれど、いひまはせば聞ゆるなり、云々」と絶讀している。たしかにこの歌の掛け詞や縁語の用い方は見事である。しかし、その修辭が活きるのは、杣山の木と生活の苦しさに耐えている自分とが互いに密接な譬喩關係で支え合っているからこそである。「身をくだく」のは、杣山の木であると同時に俊成自身であり、人一人訪れることのない深山で重くのしかかる雪を背負って孤独に立っている木は、彼の心の中の「なげき」という名の木のことである。この歌に耳を澄ますと、雪がしんしんと降る中で、突然ポキッと折れる音が聞こえてくるようだ。

さて、次は定家の「そなれ松」の歌に耳を澄ます番である。「そなれ松」が重る雪で折れる音が聞こえてくるであらうか。おそらく「岩うちやまぬ浪」の音に掻消されて、それは聞こえてこぬであらう。しかし、たしかに「そなれ松」は折れたのである。この音の隠蔽は、この歌の中で象徴的な意味をもつてくるはずである。つまり、俊成の歌を意識しても、あるいは源重之の恋歌を意識しても、「なげきの身をくだく」乃至は「くだけて物を思ふ」という、感情に直接言及する言葉が浮かんで来るにもかかわらず、定

家はそれを避けている。当面の歌は冬の歌であるから、露骨な述懐を表す言葉遣いは避けたのだと言えばそれまでだが、逆に「身をくだく」などという言葉を用いていないにもかかわらず、何故四季の歌に述懐歌の要素をもち込むことが可能になったのかという問題をたてた場合、右の解決は無効になるだろう。「雪をれ」の木、「岩うちやまぬ浪」これらの景物は最早純然たる自然の中の一風景として存立し得るものではなく、対応する心情を必ず付随して意味をなす一種の記号にまで抽象化されていたと考える他はない。極論をすれば、定家の目に映る(頭に宿る)自然物はすべて背景に何らかの心境を予期させる記憶の蓄積物であったのだ。例えば同じ守覚法親王家五十首の春歌には、

道のべにたれうへをきてふりにけんのこれる柳ははるは  
わすれず  
(一六三三)

という歌がある。この歌は我々に即座に新古今集雑歌上に採られている菅原道真の「道のべの朽木の柳春来ればあはれ昔としのばれぞする」を連想させる。路傍の古柳は昔がしのばれる存在として定家の前にある。そこで「たれうへ

をきてふりにけん」という表現が可能になるのであろう。多かれ少なかれ歌に現れる題材は対応する心情を伴ってうたい継がれて行くものであるが、定家の時代にそれは極限に近い状態にまで立ち到っていたのだと思う。そして、ことは歌の題材ばかりではなく、言葉遣いそのものが、何かを連想させる働きを付随していた。たとえば千五百番歌合における顯昭の判詞を見るとよい。彼の如く厖大な歌の数も覚え込んでいるような人にとっては、どのような歌にも本歌・証歌の類を指摘することが可能だったのだ。一口に新古今時代を言うならば、全き新しい歌が生れるに甚だ困難な時代だったと言つてよい。定家における本歌取とは、そうした歌の困難を逆手にとつて創造を行おうとする極めて挑戦的な詠歌行為だった。

少々横道に逸れてしまつたが、定家の「そなれ松」の歌では、直接的には己の述懐を少しもうたつてはいない。「そなれ松」の梢の折れる音が波に消されてしまうように、物思ひをする情の告白は下に塗込められて、「さみしさ」という一歩下がった客観によつて、歌は切られている。しかし述懐的な情は、歌の奥行きを深くし、その厚みをつけている。「そなれ松」の歌の場合も、先の「年ふとも」

の歌と同様に、述懐的なものは非常に虚構化されたものだと言えよう。更に次の歌を見てみよう。

おもかげにこひつゝまちし櫻花さけばたちそふ峯の白  
雪  
(一六三五)

この歌も定家の歌としては一見平明な歌で、とりたてて論ずるものはないように見えるし、事実さほどの名歌とは思われないのであるが、俊成の、

おもかげに花の姿をさきだてゝいくへこえきぬ峯のし  
らくも

を響かせて味わつてみると、考えさせる所が多いのである。『無名抄』によれば、俊成の「面影に」の歌は、俊成自讃歌であると「世にあまねく人の申」す所であつたという。俊恵に自讃歌を尋ねられた俊成は「夕されば野辺の秋風身にしみて鶉鳴くなり深草の里」をあげ、「面影に」の歌はそれには「いひ較ぶべからず」と答えたという。今ここで二首の優劣を論じているひまはないが、「面影に」の



歌が定家の一時代前に、俊成の代表作として世間で喧伝されていたことは間違いない。定家が後年この歌を新勅撰集に撰んだ意図も父の記念的な作であるという点にあったのだと思う。

長秋詠藻では、この歌の詞書に「崇徳院近衛殿に御幸ありし日、遠尋山花といふ心をよませ給し時よめる」とある。私は、崇徳院の前でまたは俊成は述懐の要素が混入している歌をよんだのだ、と考える。花の姿とは、人生における栄光の座の譬喩とよめる。栄光を幻の如く追い求めて、私は幾重もの山を艱難しつゝ越えて来た、というふうな意味によめないだろうか。さほどにはっきりと述懐の意味を酌んでしまうと、歌の魅力は半減してしまうけれども「いくへこえきぬ」という言葉には、人生の道程を髣髴させるものがあることは確かだ。この春歌においても俊成の歌づくりは、その特徴を發揮していると言ふべきだ。個人的な心境を暗示することで、歌は抒情性を獲得しているのである。

翻って定家の歌はどうか。「面影に」の歌は春の第七首目に位置するが、その五首前に、

わかなつむ宮この野邊にうちむれて花かとぞ見る峯の  
白雪  
(一六三〇)

がある。まだ春は浅い。都の野辺では若菜を摘んでいるが、峯には白雪が残っている。それはまるで花と見紛う、というのである。この歌はちょうど「面影に」の歌の布石の役割を果たしている。若菜の頃に花と見紛えた峯の白雪、それほどまでに「面影にこひつつ待ちし櫻花」が、今ようやく咲いた。咲いてみると、まだ溶けずに残っている峯の白雪が花に「たちそふ」で見える。そういう連歌的な構造がここに認められる。五十首歌における歌の連続をいわば横の線とすると、初句と結句を同じくする（「峯の白雪」と「峯の白雪」との違いはあるが）俊成の歌からの影響は縦の線と見ることが出来る。五十首歌の横からの線と縦の線とを交差させることによって、俊成の幾分人生の労苦を感じさせる感傷を払拭させている。「さげばたちそふ峯の白雪」という華麗な光景は、遠くから花を眺める者の表現であって、山を越えて花を尋ねた者の表現ではない。しかしながら、遠くから花と白雪を共に眺める視線の中には、白雪を花と見紛いながら幾重もの山を越えて辛苦した

者がいたのだなあという感慨が享受する側に忍びこむような配慮がある。敢えて飛躍して言うのだが、俊成の「幽玄」と定家の「有心」との違いは、このようなものではないだろうか。

### 3

定家は毎月抄の中で、次のように述べている。

又、戀・述懐などやうの題を得ては、ひとへにたゞ有心の躰をのみよむべしとおぼえて候。此躰ならでは、よろしからぬ事にて候べきか。

毎月抄の中で「有心の躰」が如何なる意味をもつて使われているかは、重要な問題であるが、今は触れない。しかし有心体が彼の最も尊重した歌体であつて、また単なる歌体にとどまらず、詠歌行為の際の心構えにまでなつてゐることを指摘して置こう。今私が問題にしたいのは、有心の体を論ずる際に定家が恋と述懐を並列にしている点である。思いを述べるといふ点に關しては共通するから、さし

て問題はないというふうにも考えられるが、彼はここで有心体という最も重要な自身の歌作りについて言及しているのである。彼の恋歌の虚構性はよく論じられるし、四季の歌にも恋の情調を揺曳させる手法がしばしば見られるといふことも、よく指摘される。同時に、定家にとつては述懐も恋と同じ方法を取るべき題材であつたらしい。述懐的なものを四季の歌にもち込むことによつて歌が立体的なものになるといふことは、今まで見て来た二、三の例でもうかがわれるだろう。定家にあつて、恋と述懐は共に虚構的なものといふ点で、交差概念であつたと考える。恋が己の恋の告白でないのと同様に、述懐も己の懐を述べることに眼目があつたのではないのである。また守覚法親王家五十首から一首の例を引き、恋と述懐が融合しつゝ一首の仮象世界を成り立たせていることを確かめてみよう。

年ふれば涙のいたくもりつゝ月さへすつる心地こそ  
すれ  
(一六五三)

まさしく述懐歌の如き印象を受けるが、これは秋の歌である。単に月をうたつてゐるから秋歌としてゐるといふ感

さえ受ける。老年に近づくと涙もろくなり、月がはつきり目に映らず、月さえも我身から離れて行くように感じられる、というのであろう。「月さへすつる」と言うのだから、友とする人は勿論いないのだろう。が、これは「月さえ私を見捨ててしまうような心地がする」という文脈も、「私は月さえ捨ててしまう心地がする」という文脈にもなるだろう。どちらかが正解で、一つを退けるという訳にはいかないだろう。たくさん曖昧に思われる。しかも、月と「私」の関係が涙によって隔絶してしまうという点においては同じだが、能動か受動かの意味の幅は大きい。「月さえを捨てる」と言えば、浮かんで来る人物は、世捨て人の面影をもつてくる。何もかもを捨てて来て、老年に到って出家の頼りとしていた月さえも捨ててしまうような心地である。定家の頭には、西行が宿っていたのではなからうか。涙が月を曇らせるという歌を、西行は多く残している。

おもひ知るを世には限なき影ならずわが目にくもる月の光は

涙ゆへくまなき月ぞくもりぬる天のはらはらとのみな  
かれて

いかにせん影をば袖に宿せども心のすめば月のくもるを

しかし、これら三首の中で、西行は月を捨てるというようになことは言っていない。またその涙も老年故のものだとも言っていない。むしろ「いかにせん」の歌では「心のすめば月のくもるを」と言っている。涙が湧き出す泉は、彼の心の「限」である。西行にはまた次のような歌がある。

物思ふ心の限を拭ひうててくもらぬ月を見るよしもがな

この歌は恋の歌であるから、「心の限」はすなわち恋する心の闇ということになるが、西行の恋する心は決して男女の恋のみにとどまらない。現世において「あはれ」を感じさせる何ものかに執着する心を「心の限」といっているのだろう。さらに、雑の歌に「心に思ひける事を」という詞書きで、

いかでわれ清く曇らぬ身になりて心の月の影をみが

ん

という歌がある。「心の隈を拭ひう」つ事は「清く曇らぬ身にな」る事と同じである。月は仏道修業の鏡であった。それ故「心の月の影をみがかん」という表現が出てくる。けれども「あはれ」に執する心が涙を誘い、「心の月」を曇らせるのである。月は道心の象徴であると同時に、「あはれ」を催させる美的対象でもあったのだ。月にむかつて「あはれ」を感じ、涙など流すべきではないのだ。にもかかわらず「心のすめば月のくもるを」という現実がある。そこで彼はその矛盾を「いかにせん」と言っているのである。月は対立する二重の意味をもって西行に迫る。

それに対して定家の「月さへすつる心地こそすれ」という言葉には、西行の月の歌に見られる切迫した調子がない。比喩的に言うとき作者と歌の主人公が別であって、作者はあくまで演出の側に回っている。言葉を換えれば、定家の月はあくまで中天に存在する月であって、「心の月」ではない。仏道修業を志しながらも、容易に道心を持つことの出来ない人間の嘆きを感じられる。

そして、「月さへすつる心地こそすれ」を「月にさえ私

は捨てられるようだ」というふうには解釈すると、歌の雰囲気はまた一転し、この歌の主人公は世捨人などではなくて、長い間空圍を守る哀れな女性が浮かんで来るのではない。一首に響く情調は恋の怨みに変じて来る。こうした述懐の層と恋の層とを重ねる趣向は、五十首歌における直前の歌が、

秋風にわびてたまちる袖のうへをわれとひがほにやど  
る月哉  
(一六五二)

であって、この歌からひきつづいているものだと見ることが出来る。

誰も訪れることがない孤独な身の上の人が秋風に怫びて涙を袖に落とす。するとその涙に「われとひ顔」に月が宿る、という歌である。閑居の体と見ることが出来るが、「わびてたまちる」は、やはり恋の言葉であろう。秋風の「あき」には「飽き」を利かせて、男が通って来なくなつた女性が涙を落とす、すると月が代わりに通つて来たという顔で宿る、そういう文脈が成り立つ。

建久四年六百番歌合の「祈恋」で、良経は、

幾夜われ波にしほれて貴船河袖にたまちるもの思ふらん

の歌を作している。判者俊成は「『袖に玉散る』と云へるは、殊に宜(し)く聞(き)待(まち)る(る)にや。」と言って、これを勝としてゐる。言うまでもなく、良経の歌の本歌は、和泉式部が貴船に参つたときの貴船明神の返歌「奥山にたぎりて落つる瀧つ瀬の玉ちるばかり物な思ひそ」である。これを本歌としたからこそ「祈恋」の題に適うのである。貴船明神の歌の「玉ちる」は、魂が遊離するという意と、瀧の水繁吹が散るといふ意が掛かっている。良経の「袖にたまちる」は、それに涙が落ちるといふ意が加わる。俊成はそれに殊更感心したのであらう。激しい恋に耐える女性の「袖にたまちる」といふ表現は、冴えている。おそらく、定家はこれを強く銘記したのであらう。定家の「わびてたまちる袖のうへ」は、良経の「袖に玉ちる」をひねった言いまわしであらう。良経の佳句を取ったというよりも、一つの詩的共同体が所有する佳句を応用したと言つた方が適切である。流行の詞とか、ひいては流行の風というものは、それなくしてはあり得まい。定家の歌は、六百番歌合における

良経の歌を当時の享受者達に想起させ、その向うに和泉式部という女性をほの見えさせる。秋風に怗びて涙を流す女性に和泉式部の傍があると書いても言い過ぎではあるまい。「わびてたまちる」が恋の言葉だと述べた所以である。同時に、袖の涙に月が宿るといふモチーフは、また西行の歌によく見出されるものである。

忍びねの涙たゞふる袖のうらになづまずやどる秋の夜の月

夜もすがら月こそ袖に宿りけれ昔の秋を思ひ出づれば  
更に、「××顔」といふ表現は西行に頗る多い。

なげゝとて月やはものをおもはするかこちがほなる我涙かな

月を見る心の節を咎にしたりより得がほにぬるる袖哉  
身を知れば人の咎にはおもはぬに怨み顔にもぬるゝ袖哉

こよひはと心得顔に澄む月のひかりもてなす菊の白露

という具合である。接尾語ふうの「××顔」なる語は、西行の場合「こよひはと」の歌一首を例外として、皆「袖」もしくは「涙」の形容になっている。いわば月に正対する者の内面の表現だ。世を捨てた男が、一途に月を道心の鏡と見ることが出来ずに、思い乱れ、右往左往する、その心の動きを反省的な自意識が捉えたときに、西行の「××顔」という語が誕生するのである。ところが定家の「われとひがほ」は月の擬人化である。月は人事に正対するものではなく、人（女）の許に通う人（男）に比されている。西行の歌は心境の告白に他ならないが、定家の歌はいわば劇なのである。定家自身は歌の中には登場しない。和泉式部を思わせるような女性を臚げに浮かばせて、西行的な心境をそこに重ねているのである。

「年ふれば涙のいたくもりつゝ月さへすつる心地こそすれ」にもどって考えてみても、「秋風に」の歌の場合と、径庭はない。女性の恋の嘆きに加えて西行的な述懐を重ねる。と見てくると、恋と述懐の要素は最早截然と分けられるものではない。四季の歌に忍び込まれた恋歌的なものの、述懐歌的なものは、同時に成り立っていると云っていい程だ。かくして、毎月抄の中で「又、戀・述懐などや

うの題を得ては、ひとへにただ有心の躰のみよむべしとおぼえて候。」と、恋と述懐を並列にして述べていることが納得されるのである。

定家の歌における述懐的なものは、父俊成から受け継ぎ、西行の如き心境歌人に習ったと言つてよいが、決してそれを繰返したものではなかった。恋歌の虚構と重なるまでにそれは虚構の中で再構成され、語義通りの「懐を述ぶる」ものではなく、四季歌に心をもたせる一つの方法として、述懐的なものは働いた。これは、定家の有心体を考える際にも、またその本歌取を考える際にも、是非踏まえておくべきことのように思われるのである。

【註】

定家の歌番号は冷泉為臣編『藤原定家全歌集』（国書刊行会）の歌番号である。